

2022年3月20日佐土原キリスト教会礼拝説教

聖書箇所：マルコ福音書5章1～20節

説教題：主がどんなにあわれんでくださったか

20年ほど前、「パッション」という映画が話題になりました。イエス様の最後の12時間—(ゲッセマネから十字架まで)—を克明に描いた映画です。ご覧になった方もおられると思います。私にとって印象的な場面は—(「悪魔」は何とかしてイエス様の十字架を止めようとした、でも出来なかった、そして)—十字架が成し遂げられた時、「悪魔」が「ギャー」と絶望の叫びを上げる場面です。イエスの十字架が成ったことで、人が—(人の魂が)—天国に入って行く道が開かれたのです。「悪魔」はそうさせたくなかった。しかし、十字架の御業が成ってもうどうしようもない。今、神を信じる魂は天国へ帰って行くのです。だからキリスト者の葬儀は、もちろん悲しみは大きいですが、しかし希望がある、セレブレーション(お祝い)なのです。では、あと「悪魔」に出来ることは何か。「悪あがき」です。あの手この手で人々に絶望を与え、神を信じさせないようにする、それを一生懸命やっているのです。(因みに「悪魔」は、天地創造の前に墮落した天使達の長です。その「悪魔」の下に多くの「悪霊」がいる。それが聖書の教えるところですが)。今日の箇所は「悪魔/悪霊」について考えさせる箇所です。喜びに溢れるテーマではありません。不安にもなります。しかし初めに申し上げたいのは、確かに聖書は「悪魔/悪霊は現実的な存在である」と教えますが、同時に「悪魔/悪霊はすでに負けている」と教えるのです。それを確認したいと思います。

前回は、イエスと弟子達がガリラヤ湖を渡ろうとして、突風に出遭い、イエスが突風を静められた記事を学びました。その後、一行がたどり着いたのが「ゲラサ人の地」(1)でした。そこは、ガリラヤ湖の対岸、異邦人の町でした。そこに一行が着いた時、イエス様の前に「悪霊」に憑かれた男がやって来るのです。この箇所は、イエス様と「悪霊」に憑かれた男—(あるいは「悪霊」)—とのやりとりを中心に展開します。結論から言えば、マルコがこの箇所を通して言いたいことは、「イエスは『悪霊』をも支配なさる権威(力)を持っておられる」ということです。「そのイエスが今も生きておられる」ということです。しかし、私はこの箇所を「悪魔/悪霊の働きと私達との関係」から考えたいのです。2つのことをお話しします。

1. 悪霊の存在の現実

「悪霊」に憑かれた男は、「衣服を着ていない。墓場に住んでいた。鎖に繋がれ、足枷をはめられ、時に『悪霊』の力によって鎖や足枷を引きちぎって墓場や山をさまよっていた」、そういう悲惨な状態でした。家族から引き離され、人間社会からも追放され、訳の分からないものに突き動かされているのです。その状態を一言で言えば「破壊」です。「人間性の破壊、人間関係の破壊、平穏な生活の破壊」、全てが「破壊」に向かっているのです。「悪霊」の働きは「破壊」であり、「悪霊」に憑かれた者にもたらされるのは「破壊」です。それは、この後、「悪霊」が入り込んだ豚が湖に落ちて滅んでしまう—(「破壊」されてしまう)—ことから言えます。

私達の社会では、「悪霊に憑かれた人」がウロウロ歩き回っているという形では、「悪霊」は働いていないように思えます。しかしこの社会では、「悪霊」はもっと巧みな方法で私達に働いているように思うのです。少し話が大きくなりますが、例えば私は、ある宗教団体の事件を考えるのです。(敢えて名前は出ませんが…)。1995年、その宗教団体が、様々な問題を起こし、最後には地下鉄の中で毒ガスをまいて、多くの人を殺傷するという事件を引き起こしました。事件に関わって14名が命を落とし、6000名以上の方が何らかの被害にあったのです。あの事件で日本人の宗教に対する否定的な見方が一般化しました。教祖は、信者を支配し、更には世の中に対しても影響力—(支配力)—を持つようとしたのです。その過程で邪魔な者を殺すことまでしたのです。私は、事件の背後に「悪霊」の存在を感じるのです。ある雑誌が教祖について述べていました。彼がそのような問題を起こして行く一番の原因がどこにあったかという、彼を近くで見て来た人は「彼には人間そのものを破壊してし

まうような『憎しみ』を感じた」と言うのです。その「憎しみ」の感情はどこから出て来たのか。それは、少年時代、彼は貧しさと障害—(目が不自由だった)—のために沢山の差別を受け、その差別を屈辱として感じて、それがやがて人に対する「憎しみ」、世の中に対する「憎しみ」という感情に結びついたのではないかということでした—(ある意味で不幸な出来事です)。しかし、その記事にはこうもありました。「憎悪がサリンに行きつき、その憎悪が、程度の差こそあれ人間だれしものが持ち得る感情であることに『問題』の根深さがある」。

現代社会では、「悪霊」は、私達、誰の中にもある「憎しみ、恨み」、あるいは「妬み」、そのような感情を利用して私達に働きかけ—(この事件のような大きなことでなくても)—様々な破壊の業—(自分を破壊し、人を破壊し、関係を破壊する業)—を為しているのではないかと思うのです。「ヤコブ書」は言います。「もしあなたがたの心の中に、苦いねたみと敵対心があるならば、誇ってはいけません…そのような知恵は、上から来たものではなく、地に属し、肉に属し、悪霊に属するものです。ねたみや敵対心のあるところには、秩序の乱れやあらゆる邪悪な行いがあるからです」(ヤコブ 3:14~16)。私も自分の通って来た道を振り返って「苦い思いや利己心を『悪霊』に利用されたのかな」と思うような経験が幾つもあります。その時には分かりませんが…。私は、社会にある様々な問題の背後、世界中の紛争や暴力の背後にも、人間の憎しみや敵対心を利用して破壊を起こそうとする「悪霊」の働きがあるような気がして仕方がないのです。

いずれにしても、「悪魔/悪霊」はもう決定的に負けている、しかし一生懸命、悪あがきをしている、だから私達は「悪魔/悪霊」の存在を軽く考えてはならないと思うのです。CS ルイスの「悪魔の手紙」の中で「叔父さん悪霊」は「甥の悪霊」に指導して言います。「君の担当している息子と母親とが互いに嫌がらせをし合い…(それが)すっかり習慣となって身につくようにしなさい」。彼らは、私達の様々な否定的な思いを利用して、私達に「破壊」を経験させようとします。そして私達を絶望させ、神から引き離そうとします。「悪魔/悪霊」の働きがあるということ、まずそのことを認めることが、自らを「悪魔/悪霊」の働きから守って行くために大事なことだと思います。

2. 悪霊からの解放

「『悪霊』の存在を認め、利用されないように気をつける」、それがまず大事なことです。しかし、それだけでは何とも頼りない話です。まるで、ゲラサの人々がこの男を恐れて鎖で繋ぎ止めておこうとしたようなものです。彼らは結局、「悪霊に憑かれた男」と、いや「悪霊」と共存して、何とかやっけて行こうとしたのです。しかし、それは本当の解決にはならなかったのです。何が解決をもたらしたのか。彼は、イエス様の権威(力)によって「悪霊」から解放されて行くのです。

この箇所から、イエスと「悪霊」との関係についてはっきりと知ることが出来ます。イエスが「悪霊」に「この人から出て行け」(8)と言われると、「悪霊」はイエス様に向かって「いと高き神の子、イエスさま、いったい私に何をしようというのです。神の御名によってお願いします。どうか私を苦しめないでください」(7)とお願いします。並行個所の「ルカ 8 章」によれば、「悪霊」は「底しれぬ所へ行け、とはお命じになりませんように」(ルカ 8:31)とイエスに願います。(「底しれぬ所」とは、終末の時に『悪霊』が追いやられる場所です。そこに追いやられると二度の人間世界へ戻って来ることは出来ないのです)。そこで「ではどこに行こうか」ということになり、「豚…に乗り移らせてください」(12)と願い、イエス様に許可をもらって豚の中に入りました。確かに「悪霊」は、人間を超えた超人的な存在かも知れないし、人間世界に「混乱と破壊」をもたらしている存在かも知れません。しかし、イエス様の権威の前には、彼らは、お願いして許可をもらわなければならない存在なのです。だから、私達が「悪霊」の働きから守られる最良の方法は、イエス様に頼ることなのです。ゲラサの男は、イエス様の前に出て来たのです。彼の人間的な面が、助けを求めて来たのでしょう。それで救われて行くのです。

「ルカ 22 章」でイエス様は、ペテロに言われました。「シモン、シモン、サタンはあなたがたを、

小麦のようにふるいにかけることを神に願って聞き入れられた。しかし、わたしはあなたのために、信仰が無くならないように祈った。だから、あなたは立ち直ったら、兄弟たちを力づけてやりなさい」(ルカ 22:31~32)。なぜ、神が「サタン(悪魔)」の願いを赦されたのか、もっと言うと「悪魔」の存在自体を許しておられるのか、それは分かりません。しかし、今日の箇所最後の部分が教えるのは、イエス様を見た沢山の人々の中で、イエス様に目が開かれたのは「悪霊」に苦しめられた男だけだったということです。他の人々はイエス様に「この地方から離れてく(ださい)」(17)と行ったのです。ペテロは、この後つまずいてしまいます。彼がイエスを3度裏切った、それも「悪魔」の働きだったのでしょう。しかし、その経験があったからこそ、彼はイエス様をもっと愛するようになるし、いや何よりも、彼がこれから宣べ伝えて行く「イエス様の赦し」の意味を、自分のこととして経験し、理解することが出来たのです。ここに神が「悪」の働きを、なお許しておられる理由の1つがあるように思いますが…。いずれにしても、イエスはペテロのために祈られたのです。そして彼はイエス様の祈りに守られて、また立ち上がることが出来たのです。イエスは私達をも執り成して下さるのです。だから私達も「悪魔/悪霊」の働きを受けないように、「我らを…悪より救い出だし給え」と祈り、イエス様に頼ることが最も良い方法なのです。イエス様に頼り、神の中に逃げ込んで行く限り、私達は「悪」の働きを恐れなくて良いのです。

しかし、私達の日々の祈りの中に「私…を試みに会わせないで、悪からお救いください」(マタイ 6:13)という真剣な祈りがあるのでしょうか。ある牧師がこんなことを言っておられます。「試みを克服しようとしてはいけない…試みには、必ず負ける。悪しき者には、必ず倒されるのです。信仰には百戦錬磨ということはありません。誘惑には負けるのです。だから試みに抗しきれない自分を徹底的に知ることが大切です。悪しき者と闘えない自分を徹底的に知ることが大切です。それゆえ、ひたすらに神によりたのむことをこの祈りは教えているのです。神の御手に逃れて勝つのです」(小島誠志)。私達は、「悪」が自分にも様々な形で働く可能性があるという健全な恐れを持って、イエス様の助けを普段に祈り求めて行く、それが大切ではないのでしょうか。CS ルイスは「悪魔の手紙」で、『悪魔/悪霊』が最も恐れるのは、私達が祈ることだ」と教えています。

しかし、イエス様の前に出て守りを祈り求めるといふ時、忘れてはならないポイントがあると思うのです。先程、「私達を危険に陥れるのは、『怒りや憎しみ』に代表されるような感情ではないか」と言いました。先日もご紹介しましたが、「百万人の福音」にカーラ・タッカーという方の証がありました。彼女は、友人と共謀して恨みを抱いていた男性を殺してしまいます。まさに「悪霊」に操られたような状況です。ところが刑務所の中で劇的な回心を経験するのです。そのあまりの変化に、やがて彼女を逮捕した刑事や、果ては殺された男性のお姉さんまでが、彼女が死刑にならないように助命嘆願をするようになるのです。結果的には死刑が執行されたのですが、しかし「何が彼女の人間性をあれほど見事に回復させたのか」ということが人々の心に残ったのです。それは一言で言うと「イエス様の赦し」だったのです。恐らく彼女もある時、犯してしまった罪の大きさ、その罪責感に耐えられないような思いになったのだと思うのです。そんな中で彼女は、聖書を通して「自分の罪のために苦しんでくれた人がいる、私が神に赦されるために死んでくれた人がいる」、そのことを具体的な真実として受け止めて行ったのではないのでしょうか。自分の罪に苦しめば苦しむほど、十字架を通して差し出されている「赦し」の有難さは途方もないものだと思います。それが彼女の心を溶かして行ったのだと思うのです。

何を教えられるかという、私達の「憎しみ」に悪霊が働くとしたら、私達にはその「憎しみ」を溶かしてくれるのが必要なのです。何が私達の心を溶かすのか。それは19節に「主があなたに、どんなに大きなことをしてくださったか、どんなにあわれんでくださったかを、知らせなさい」(19)とあるように「自分がどんなところから神に救われ、赦され、愛されて来たか」、それを確認することではないかと思うのです。そして、自分が今も絶えざる神の赦しの中に生かされていること、そのことを祈りの中で確認することではないかと思うのです。1861年、アメリカで南部諸州が北部から

離反して南北戦争が起こりました。4年後、戦争が終わって、北軍が勝った時、ある人が北軍の指導者リンカーン大統領に聞きました。「南軍(南部)の人々をどうしますか」。リンカーンは答えました。「私は、離反など全くなかったかのように彼らを扱うつもりです。なぜなら神ご自身が私達をそのように扱われたのですから」。リンカーンの心には、イエス様の語られた「放蕩息子の譬え話」—(「父親の財産を無理やり分けてもらって、外国で放蕩の限りを尽くし、落ちぶれてボロボロになって帰って来た息子を、父親が大喜びで迎えた」という譬え話)—があったのです。自分も神にただ赦され、ただ受け入れてもらったという思いがあったのです。戦争では、彼も危機的な状況に置かれた。しかし「赦されている」という思いが、「憎しみ」に勝利させたのです。そうやって戦争で傷ついた南北両軍(両地域)の溝が埋められて行ったのです。「瞬き詩人」と言われた水野源三さんがこんな詩を作っています。「いつわりを言う人や頑なな人をも、愛さなければ、愛さなければ。主に愛されているのだから、主に愛されているのだから」(水野源三)。主に愛され、赦され続けている、その自覚が私達の心を溶かし、私達の「憎しみ」を利用しようとする「悪魔/悪霊」の働きから私達を守って行くように、在るべき心の状態に回復させて行くように思うのです。

3. 悪霊から守っておられる主

最後に1つのお話をして終わります。1970年代、カンボジアの人々は、ポル・ポト政権下で恐怖と暗黒を経験します。「キリング・フィールド」という映画を御覧になった方もあると思います。その過酷な状況の中でクリスチャン達も大きな戦いを経験しました。ポル・ポト政権下では、人々は「憎む」ことを教えられました。そんな中でクリスチャンとして生き抜くためには、彼らは神の支えにすがるしかなかったのです。彼らは、夜起き出して祈り、隠し持った聖書を読み、神の導きを祈り求めたのです。ところが、そんな中で彼らは不思議な出来事を経験して行くのです。ある牧師が家で集会を守っていたら、村人ばかりでなくポル・ポト派の兵士までが魂の渴きを覚えて訪ねて来たそうです。彼らが牧師に聞くのだそうです。「あなたの家に入出入りして、いつも戸口の階段に腰掛けている、あの威厳のある人はだれですか」。牧師の家族は誰もその人を見ていなかったのです。でも彼らには、主が彼らを守っておられるということが分かるのです。私はこの話を聞いて、きっと「悪霊」の目から見た私達は、その牧師の家のようにはないかと思ったのです。彼らは、私達を威厳のある方が守っておられるのを見ているのです。「悪魔/悪霊」は負けています。しかし、依然として「悪魔/悪霊」の働きはあります。だから、私達は健全な恐れを持って私達を守っておられる主に頼って行きたいと思うのです。